H28夏期研修レポート　厚澤　浩

「子どもはみんな問題児を読んで」～皆さんに考えてもらいたかったこと～

　以前インターネットのコラムに書きましたが、中川　李枝子と文中にも出てきますが石井　桃子の２人を

スタジオジブリの宮崎　駿さんは(自分が)「歯が立たない女ども」と呼んで敬意を払っています。

　子どものことをかなり解っていてグラミー賞を獲るアニメを作っている宮崎さんが「歯が立たない」レベルにいるのですから、いかにそのレベルが高いかということが伺えると思います。

　前矢嶌名誉園長がよく言っていました。一流の絵本作家や、その編集者の人は、下手な教育者よりも子どもや、その教育についての見識が高いと…。私もその通りだと思います。

　その中でも、中川　李枝子さんは１７年間という長い間自らが保母として小さい子どもたちと一緒にいたわけですから、突出していると言えるでしょう。

　この本には、子どもに一流の本を与えることの大切さについても記されていますが、このことについて…。

さいたま市がまだ浦和市だった頃、市幼稚園協会主催で研修講演会がありました。講師はある絵本作家のおばさんで、「チムとターク」というシリーズの絵本の著者でした。講演中、その本を読み聞かせする時間もあったのですが、内容はというと、小さなチムとのっぽのタークという登場人物が出てきて、色々な場面を経験し「人間は仲間同士仲良くしなくてはいけませんよ!」という教育意図がかなり絵本に盛り込まれた内容でした。そういう意味では、しつけ絵本のようなことを狙っているのでしょうが、一緒に講演を聞いた矢嶌園長が「こういう絵本は福音館書店では出さないねー」と会場を出てすぐに言っていました。

　また、ある先生は研究保育で「ともだちや」という絵本を読みました。そのクラスにはADHDと診断されたM君がいました。M君は家庭の協力もあって絵本は好きな子です。でも、その本はあまり見れませんでした。「ともだちとは仲良くしなくてはいけないよ。という教条的メッセージを敏感に感じとったのかな…」と言ったら、「は…」とその先生はすぐに気付いていました。

　「人間の心の扉は内側からしか開かない」ある心理学者の言葉です。

　「感じたことは、子どもの心と体にずっと残っていく」子どものともを創刊した松居　直さんの言葉です。

小さい子程、自然に近い存在です。明日は絶対に雨でもなく、晴れでもない。ペンキで塗ったように季節は変わらない。そのことを理解しながら、日々の保育・「指導」にあたってください。無論、信念的なベクトルは忘れずに。

　そして無垢な子どもに程、一流のものを与える必要があり、それを見抜いて与える環境にするのは周りにいる大人の重要な役割です。子どもはあっと言う間に大きくなり、特に芸術的感性(感じる力)の吸収・構築時期が過ぎてしまいます。後から獲得するのは中々困難です。

「くだらないものを読むのは時間の無駄です。」正にその通り。

(｢読む｣ならまだましで、今はスマホ・ゲーム・テレビ・SNSと百科繚乱です。本当に大変な時代ですね。)

文中にもあるように、「よい本、つまらない本を直感的に嗅ぎわける力」を身につけ、

どうぞ、「子どもを幸せな状態に置く」保育の醍醐味を味わってください。

そう、この仕事「子どもからもらえるものはもらっておいて、楽しまなければ損」ですから。